の集約的商品農業が行われている。本論文では、このような扇央部に隣接して位置する。果樹中心の西野、果樹、養蚕、温室の豊、水田、養蚕、温室の飯野にみられる土地利用の地域的相異について考察した。

特に西野、豊においては自然条件は殆んど同じであるにもかかわらずこのような差異が生じたのは、耕地面積の大小、及び農家人口の大小が考えられ、一人当りの耕地面積の狭い豊、飯野には温室などの集約的農業がとり入れられていると考えられる。

又西野にいち早く果樹が導入された原因については、西野村の積極的な農民性というようなものが考えられた。

なお、最近では御勅使川扇状地においては、畑地灌漑計画も実行に移され、養蚕業の減少、果樹の増殖が著しい。

野田市の地理学的考察

坂戸かほる

マンモス都市東京に寄生する衛生都市が近年数量とも急激に増加している。bed town化した都市には、住宅団地が続々と造られ、又首都圏整備法にもとずく工業の地方分散化計画にあいまつて、工場団地が各地に形成されつつある。このように、急激に、機能的にも形態的にも変化している首都圏内の都市の状況を卒論で扱かつてみたいと考えて、千葉県野田市を選んだ。

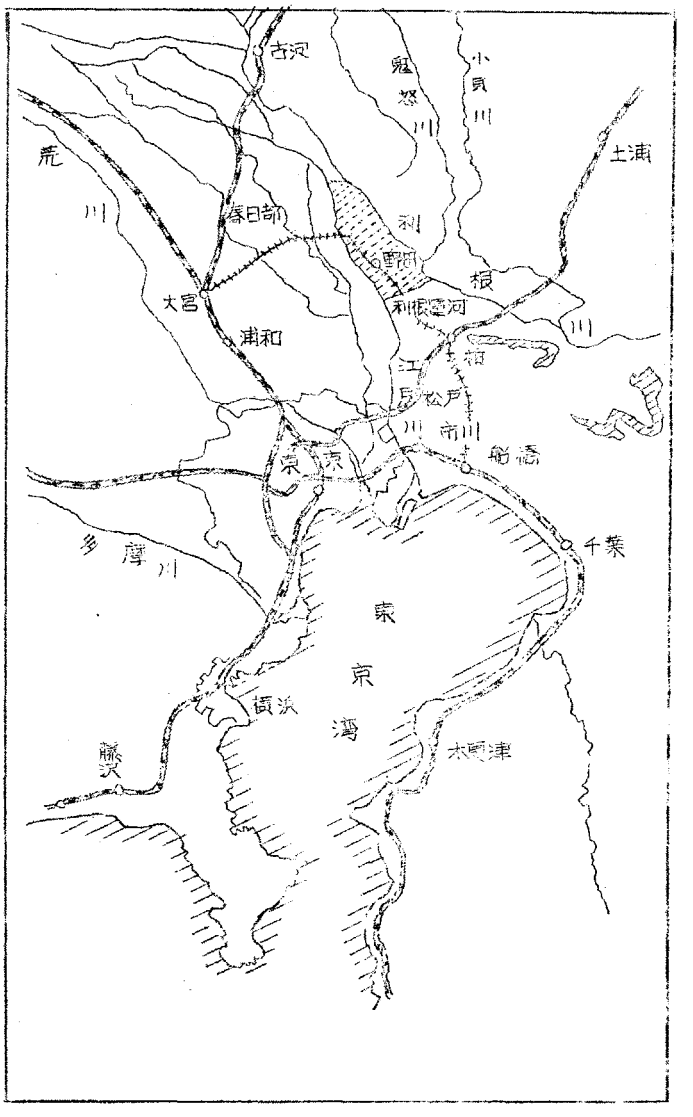
千葉県は、周囲の65%が海、35%が河川で全く水に囲まれ、しかも北部の江戸川、利根川筋は湖沼低湿地帯で、陸路の交通を妨げ、江戸からの五街道にもふれず、孤立文化圏を形成していた。その千葉県の北西端、利根、江戸両河川に挟まれ、関東平野の中央部に突出して、クサビを打つたような位置に、卒論の調査地「野田市」がある。

クサビの先端は関宿町があるが、それに続いて両河川が南流する南隣4～8km の楔形をした地域が野田市で、市の繁華街はその西寄り江戸川に接している。この関東平野の中心部の突出地点は、河川が重要な交通手段であつた時代には、有利な位置になつた。この河川交通の利用によつて、全国に有名な醸造業が発達していつたのである。

銚子の醤油、佐原の酒は利根川沿いに野田の醤油、流山の味淋は江戸川沿いに位置し、河川輸送により、大消費地江戸へと出荷されていた。河川交通から陸上交通に移る前に全国的に不動の地位を築いたので、現在も続いているが、野田より発祥において歴史の古い銚子は、消費地江戸との距離が

遠かつたために、現在の規模は野田の方が大きくなつている。

鉄道交通の時代になると、野田は、大宮、野田柏、船橋間を結ぶ東武鉄道の沿線上に位置し、大消費地東京との距離が遠くなつた。そして野田氏に代つて、旧来の工業はないが常磐線で上野と直結している柏、松戸がかえつて発展しはじめた。



人口の増加状況をみるとよく分る。大正9年には、人口野田、約29000人、柏15000人であつたが、野田は戦後の疎開による人口増加を除いては横ばい状態で50000人余りであるのに比べ、柏市は、疎開による人口増加のほかに、東京のBed townとして団地などが造られ、60000人余で飛躍的に発展している。（昭和35年統計）

このように現代では、大消費地に対する交通位置が大きく地域を左右する時代である。

果して野田市の農業はどのようになつているのであろうか。大消費地東京に近いという点から考えても明らかなように、蔬菜園芸が主となつており、生産高の70%が東京に出荷されている。この傾向は、河川交通による江戸市場を対象とする時代から続いている。蔬菜は平坦な台地上に栽培されているが、冬は北西の季節風と、火山灰のため霜が降りるので麦畑と変わる。

都市の雑多な需要に応ずるために、蔬菜の種類は多いが、特定の産物がな

い。反当収入の点では、蔬菜が第1位を占めているが、総生産額では、水稲がまだ依然としてトップで、台地を樹枝状に刻む谷底平野と沖積地につくられている。水田は半分以上が用水不足田で、全て天水や地下水の湧き水に頼らなければならない現状である。又この谷津田は、泥炭層が発達し排水不良である。つまり排水不良でありながら、天水や地下水に依存しているために用水不足に陥りやすく、水田の90%以上は一毛作田である。このような農業に従事する人口は、野田市の全就業人口の32.1%で減少の傾向にあり、質的にも兼業農家が8割近く(S.35)なつている。この兼業は主に醤油工業である。

野田といえば醤油といわれるほど有名な野田醤油の生産高は、日本全体の2割を占め県内では8割弱を占めている。遠く室町時代の1661年、和歌山県湯浅の関西商人が野田に伝えたのがはじまりである。原料となる筑波の大豆、関東各県の小麦、行徳の塩と、大消費地江戸、江戸川による河川輸送と、全て立地条件は揃つていた。発生当時は関西の下り醤油が、調理方法や伝統などにより優位であつたが、江戸の人口増加により供給が需要に追いつかず、次第に濃口の関西醤油が優勢となり、江戸の他に、養蚕機業地桐生にも消費されるようになつて、不動の地位を築いた。

現在は原料の大豆はアメリカ、小麦は国内各県の外にカナダ、塩は瀬戸内海や地中海地方と、各方面から輸入し、河川交通も利用されなくなつたので、野田に立地する必然性はないが、野田市にとつては重要な工業である。野田市の工業生産額中、食料品製造業は94.1%を占め、そのうち85%が醤油工業である。

社会的にも醤油との結びつきが強く、図書館、公民館、病院、公園などが醤油工場の経営するものである。野田市の人口の60%は醤油工業に関係しているといわれている。しかし醤油というものが、食生活の変化により消費量が減つているので、市としては、単一産業都市から複業産業都市へ脱皮しようとしている。その為、近年工場誘致の政策で2つの工場団地をつくり、20余の工場の誘致にまでこぎつけた。

しかし、総人口が少いことや、東京と交通的に遠距離だという点から、松戸や柏に比べると規模の小さい工場となつている。

以上首都圏内にあつて東京と結合するためには、交通位置が大切な要素であることは明らかである。距離だけでなく、所要時間、輸送力、回数等が問題となる。この点野田市は東武鉄道の沿線上にあるが、東京都内への直結線ではなく、乗換えなければならず、回数も少なく、輸送力も平均2輌では満足とは言えない。最近東京駅までの直通バスも開通したが所要時間の点では、

鉄道を利用するのと変らない。つまり野田市の交通位置は、東京との関係ではよい位置とは言えない。

しかしこれだけが野田市を東京の衛星都市としていないのではない。400年の歴史をもつ醤油工業が立地しているからである。都内まで転を求めなくとも、4,000人をかかえる大工業のあつたことである。交通位置と地元産業という2大因子によつて、野田市の性格が決定されていると言つても過言ではない。

丹那盆地を中心とした酪農経営

霜鳥　康子

伊豆半島の基部、東海道線「熱海」「函南」間の、丹那トンネル上に位置する。丹那盆地及びその北方の田代盆地を中心に、酪農経営について、主として、土地利用を中心に、その特色をつかむ事を調査目標とした。

○地域の概説

この地域の地形は、北方の箱根火山より古い洪積期成層火山たる、多賀、湯河原両火山の斜面が一つに連続した緩かな火山斜面で西に傾斜して、狩野川の平野に下つている。地形的特色としては、この開析された火山斜面のほゞ中央を、南北に丹那断層が通つており、顕著な断層地形の発達がみられさらに、この断層線に沿つて北より「田代」「丹那」両盆地をはじめ、本地域南方にも、いくつかの小盆地が存在することである。

交通不便な孤立的山間盆地として、最近に於ける近郊農村の急激な変貌をよそに、本地域では、農家率9割弱、専業農家4.5割という。純農村としての性格を強く残している。火山斜面であるから、東海地方としては、土地利用が非常に粗放的で、森林原野が広い面積を占め、水田は、盆地床と、狭い谷底に集中しており、その面積は少なく畑作を中心とした、酪農経営に依存している農家が多い。

○酪農経営について

本地域には、かつての幕府の天領である広大な駿河の牧が存在した。明治維新後、廃牧になつた牧を利用した。地主を中心とする牛馬産地帯として出発し、明治後半、酪農が始まつたもので、乳牛導入の時期としては、日本でも先進地の一つに数えられる。戦前までは原料乳供給地であると共に優秀な仔牛の産地として知られたが、最近では、搾乳中心に移行し、市乳の供給地となつている。その歴史的影響は、現在、飼料構造の点で、購入